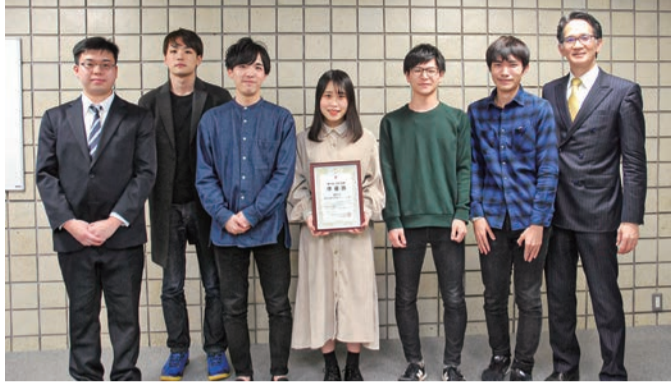


# 専大Aチーム準優勝

経済学の習得度と応用力を客観的に判断する経済学検定試験(ERE)の第32回ミクロ・マクロ「大学対抗戦」(日本経済学教育協会主催)で、専大Aチームが準優勝を果たした。

大学対抗戦は年2回開催され、ミクロ経済学、マクロ経済学(合計500点満点)が対象。各チームの成績上位4人の合計点で順位を決める。昨年12月に開催された大会……

ERE大学対抗戦で準優勝した専大Aチームの6人(右端は石川秀樹講師)



には全国8大学から16チーム122人がエントリー。本学からはエクステンションセンター主催の公務員試験講座国家総合職選抜コースの3チーム23人が参加した。

Aチームは野島音々さん(経済3)、織井雅輝さん(経済3)、斉藤慎也さん(経済3)、杉山和真さん(経済3)、丸山正睦さん(文3)、河田泰明さん(人間科学4)の6人。

昨年7月の大学対抗戦にも参加したが成績が思うように振るわず、今度こそと再挑戦した。週に2、3回、メンバーで集まり、過去問を解き、お互いに教えあうことで力を伸ばした。

チームの中で最高の420点を獲得し、大学対抗戦の個人成績でも2位、最高評価のSランクになった野島さんは「チームで意思疎通を図った結果だと思う。みんな目標を確認しモチベーションの維持につなげた」と振り返る。

河田さんは「EREの勉強は公務員試験突破にも大きく役立った。3年次生に負けられないと、自分にとっていい刺激になった」と話した。

# 『SHOW』14号刊行 特集「食の豊かさ」



文学部日本文学文化学Ⅰ回発行している。科の川上隆志ゼミによる雑誌『SHOW』14号が完成した。写真、企画、取材、撮影、執筆、編集をすべて学生が行い、年

今号の特集は「食の豊かさ」。食品ロスやコミニティーカフェ、純粋菜食主義(ヴィーガン)などを取り上げ、関係者らにインタビュー。家畜にストレスを与えず飼育する「アニマルウェルフェア」では東京・八王子の牧場を取材し、日本ではあまり知られていない畜産動物の福祉と、食の関係を問うた。

編集長の稲川佳楓さん(文3)は「食品ロスといた物理的な側面だけではなく、食の選択の豊かさや、食事環境の豊かさ、食品開発の豊かさなどさまざまな切り口で掘り下げた」と話す。

このほか、ウェブメディアで活躍のライター・カッセマサヒコさんのインタビュー、共有スペースや共同作業で緩やかにつながりながら暮らす「コレクティブハウス」の紹介など、特集以外の記事も充実している。

稲川さんは「学生の視点から社会はどう見えるのだろうか? というところから、今年の『SHOW』は生まれた。社会問題の深刻さを伝えるよりは改善に向けての取り組みや、新しいアプローチを取り上げている。何か希望が持てる、そんな雑誌になったと思う」と話す。

◇ 『SHOW』14号は生田キャンパス9号館の図書館本館前のラックで無料配布。希望者はkazumi@shoai.comにメール。

## ネットワーク情報学部「応用演習」

ネットワーク情報学部の2年次選択必修科目・応用演習の発表が2件あった。学生たちは応用演習での成果を3年次のグループ演習「プロジェクト」につないでいく。

### メディアプロデュース



教員特別奨励賞の3人に講評を伝える福富教授(右から2人目)

### 専大と多摩区の魅力 CM映像で発信

川崎市多摩区や専修大学の魅力をCM映像として制作するネットワーク情報学部の「応用演習(メディアプロデュース)」の優秀作品表彰式が1月30日、生田キャンパスで行われた。

ほとんどの学生が初めての映像作品に取り組んだ。当日は個人で制作した多摩区18、専修大学26の計44作品、グループ10作品が披露され、個人の中から優秀作品9点が発表された。審査を担当したのは川崎市多摩区と、専修大学広報課、同入学センター

担当教員の杉田このみ講師、福富忠和文学部教授、藤咲淳一非常勤講師。川崎市多摩区最優秀賞に輝いたのは佐伯響子さんの「多摩区で〇(タマ)探し」。ゴルフ部に所属する佐伯さんは、多摩区とゴルフ部のタマ(ボール)をかけ、丸いものを探して作品にした。「多摩区をできるだけ多くの人に知ってもらいたかった」と話す。

広報課最優秀賞は片桐千登さんの「せんだい! (ネ)学全面edit」。自作のイラストとキャンパスの写真でスピード感あふれるCMを作り、「君はこの4年をどう過ごす?」と問いかけた。入学センター最優秀賞は伊藤彩智歩さんの「未来の自分を見つけよ/笹村朱里

### コンテンツデザイン



多くの子どもたちが種作りを楽しんだ「君はおたねお助け隊!」

### 楽しく学ぼう! カガクおもちゃ

ネットワーク情報学部 登戸小学校が協力。学生たち「応用演習(コンテンツデザイン)」を履修する2年次生33人が、自然科学について楽しく学べる親子向けの学習教材「カガクおもちゃ」の開発に取り組んだ。

1月19日、かわさき宙と緑の科学館(川崎市多摩区)で、完成したカガクおもちゃの体験イベント「ワールドミュージアム展」を開催し、子どもたちに自然科学の面白さを伝えた。

カガクおもちゃは、小学校低学年で習う電磁気、動植物、力と運動など六つの領域に関連したもので、開発には同科学館と川崎市立

登録小学校が協力。学生たちは、約5カ月にわたり、「ワールドミュージアム展」で学生は八つのカガクおもちゃを披露。光の反射チーム(伊澤穂香代表)の「せのびスコープ」は、内蔵した2枚の鏡を反射させ、大人の視点が体験できない。動植物チーム(遠藤美穂子代表)の「君はおたねお助け隊!」は、動物の毛や人の衣服に付着して運ばれる植物の種子「くっつき虫」がどのように動物にくっついていくのか考え、観察し、くっつきやすい種を作った。体験した子どもたちからは「面白い」「もう一回やりたい」といった声が上がった。

力と運動チーム(相原樹子)はスキーのジャンプ子どもたちが喜ぶ姿を見て、日ごろの学びの成果が実感できたのではないかと成果を語った。

高さと重さによるスピードの変化を観察する「カガクラッシュ」

と重さによる運動エネルギーの変化を子どもたちに体験してもらった。

相原さんは「科学に興味を持ってもらえよう、繰り返し遊べることを意識した。多くの子どもたちに楽しんでもらえてよかった」と話した。

栗芝正臣准教